

第三章 博士の詞藻及び技藝

一、人格反映の一面

偉大なる
人格の流
露せる一
面

博士の事業は、博士の偉大なる人格の反映であると同時に、また其の人格は、他面に於いて氣品高き技藝と、饒かなる詞藻の上に流露し、混々として盡きざるものがある。畢生の功業たる疏水運河竣工祝賀の前夜、曾つて博士を援けて中道に倒れし部下の命運を悲しみ、月光のもと、一身殉事萬戸霑恩の碑に對して、徘徊願望去る能はざりし博士は、春やむかしの春ならぬ感慨に沈吟せる王朝才子の風騷に比し、其の眞實味の勝れしや幾干ぞ。語に謂はずや、詩三百一言以蔽之曰思無邪と。博士は此の意味に於いて實に生れながらの詩人である。

二、博士の文章

少年時代
を林家に
學ぶ

博士は斯かる超邁の天資を以つてして、少年時代文を林家に學び、長じて専門の業餘に修めたる和漢學上の造詣は、容易に常人の追隨を許さざる境に達して居る。

明快の文章餘韻ある辭句

文は達意を旨とし、平易なる口語體を選んで、努めて佶僂贅牙の態を避けて居るが、然も其の要なるに臨んで筆を執るや、明快の文章餘韻に富める辭句は、斯道専門家の疊を摩するに足るものがある。彼の北海道小樽築港工事中、職に殉せし博士の舊門下生、故青木政徳氏の建碑に於ける、博士の選文の如き即ち之、左に其の全文を掲げるであらう。

君姓青木、名政徳、幼稱武之助、元治元年十月生於京都城番屋敷、父曰政方、屬所司代、爲砲術師範、母桂氏、君其二子也、長兄天而君承家、性活達、勇毅、幼與群兒戲、而常爲其領袖、明治十三年爲鐵道局見習生、明治十八年余之擔任琵琶湖疏水工事、方起工之初、使君從事於長等山隧道井狀工區、蓋長等山隧道者、當時本邦第一之長隧道也、而我邦工業幼稚、工事困難、然君能完成之、明治二十一年、及關西鐵道會社起工、將穿加太隧道、缺董工之人、白石博士謀之、于余、余即推君、君能完其任、更隨平井博士、從事北海道炭礦鐵道會社、亦能盡其責、明治二十六年、任北海道廳屬就廣井博士、從於小樽築港之事、明治二十九年、陞任北海道廳技師、三十三年、叙正七位、築港防波堤工事起也、君自被潛水服、深入海中督工、時寒冷、裂膚、冒風雪、而驗波濤之力、盡瘁不別晝夜、遂得病而尙且不少已、余時爲北海道廳鐵道部長、屢勸君以靜養、不聽、防波堤工事益進而君病亦彌篤、堤垂成而君入鬼籍矣、悲夫、時明治三十三年五月十八日、行年三十有八、葬於京都六角大宮滿福寺防波堤與

手宮山、隔海相對呼欲應、君之相知相謀建碑於山上、欲傳君績、北垣前北海道廳長官題字、余不得以不文辭、乃叙其梗概如是、明治四十四年八月、從四位勳三等工學博士田邊朔郎誌

次いでものせる蓮舟翁の墓誌を掲げる。

君諱太一、號蓮舟、初稱定輔、姓田邊、石庵先生第二子、妣田邊氏、天保二年九月十六日生、年十八應昌平覺試、甲科及第、幕府特召任教授、後補外國方調役、後再出使歐洲、處難善斷、歸後任監察、明治維新、歷任外務大丞、代理公使、元老院議官、勅列錦鷄間祇候、至從三位勳三等、大正四年九月十六日薨、享年八十有五、葬青山塋域、配荒井氏生二男一女、長天女、適文學博士三宅雄二郎、次次郎、一爲三井物産會社龍動支店長、歸朝歿於地中海船中、年二十一、以侄朔郎子主計嗣家、大正五年八月工學博士田邊朔郎撰并書

博士の普通文「涙一痕」を「西伯利旅行日記」

文字に關する平素の用意

單に以上の二篇に見るも、博士が漢文に於ける修養を窺ふべく、なほ普通文に於いては、前に記載せる嗣息故秀雄氏の夭折を哀悼せる「涙一痕」の一篇最も誦すべく、更に前編に引用せる博士が西伯利旅行日記の如き事を叙するや、簡潔にして周匝、間々情最を點綴して餘情を存する、此の種の文章として一典型をなせるものと謂ふべきである。而して人若し、工學専門家たる博士が文學上の用意につき、如何に平素深き考慮を拂ひつゝあるかを知らむと欲せば、其の著書、どんねる」の卷題なる序

文一篇を讀めば、明かに會得せらるゝであらう。

ある時余が隧道ミ云ふ字を書いて居るミ、傍の友人が「君、下に土の字が落ちて居る、隧道で土が落ちては縁起が悪いミ云ふから、余は隧の字こそおちるミ云ふ字に似て居る」ミ返事をしたが、友人は矢張り字が間違つて居るミ云つて承知しないから、余は更に「易に隧者地下道也」ミ説明してある、又左傳に其樂融融云ふ處にも隧ミ書いてある、隧の次に道の字は不用であるミ云ふ事ならば問題かも知れぬが隧の字は間違つては居らぬ」ミ云つても、友人は「其の隧の字が間違つて居る」ミ云つて仲々承知しない。

そこで手近にあつた井上氏の新譯和英字典で Suido ミ云ふ處を見るミ水道ミある、Zuido ミ云ふ字は無い、何處にあるかミ搜して見るミ Tonenu ミ云ふ字がある、隧道ミ書いてある、更に落合氏のこさばのいづみを取つてすいさうミ云ふ處を見るミ草の名ミある、はてなミ考へて漸くするだうミ云ふ處で初めて隧道の字を見當てたが、友人は「そんな字引はいけない、漢字字典を見給へ」ミ云ふから調べて見るミ隧竅に通ずミ書いてある、論議は終に不得要領に歸した。

こんな漢字でも假字でも羅馬字でもむづかしい名稱を使用するよりも「こんねる」ミする方が一番平易で解り易いから本書をトンネルミ題した次第である。

三、博士の詩歌

詩は博士の最も愛好するところ

詩は博士が最も愛好するところとして、常に其の感懷を記して自ら樂しむところ。されば疏水工事の舊作にして有名なる、

一身殉事太可憐、 萬戸潤恩功世傳、

追憶當年豈無淚、 今宵明月照碑前。

世に傳へらるゝ有名の作

の即事より、工事當時の苦心を回顧して、開成防水初無疑、憶起黑風驚夢時、點滴遠簷如鼓瑟、七年夜雨不曾知と詠せる如き、而してこれよりさき、博士が水力電氣事業視察のため渡米し明治二十一年十一月四日の夜、ロッキイ山鐵道列車に乗じて、スモークキングルームより四邊の風光を觀望せる時の即事、

煙室半窓雨忽晴、 異郷山水思詩清、

鐵軌斜繫三千里、 露幾峯頭秋月明。

次いで日露交戰の際に

友人某従戎在遼陽、信中齋野花數朶率賦與之。

山河滿目送腥風、 碧血淋漓人已空。

秋色不知慘愴事、娟娟依舊野花紅。

とある如き、また日露戦争に緊切の關係ある西伯利鐵道調査當時、博士は黑龍江上蕭索たる羈旅の夢を重ね、英雄成吉思汗の覇圖悵として去んぬる舊蹟を訪ふや、偶感一絶をものせる如き、彫蟲の技必らずしも巧を極めざるも、善く事に當つて自家の情思を叙べ、而して其の自然に發露するところの風韻は時に哀切、時に流暢、人の胸臆を動かさずんば止まないものである。殊に往年、吉井川旭川の水力の調査終つて、松江市に赴き、碧玲瓏たる宍道湖に扁舟を浮べて石の鳥居を寄進したる嫁ヶ島に渡り、

宍道湖上
風月の情
を記す

遼社春水綠 隔市暮山蒼

華表人歸去 千年對夕陽

といふに至つては、千鳥城下の情景と相俟つて、博士が風流を永久に偲ばしむるものではないか。

博士が和
歌の嗜み

博士の詩は斯くの如く主として絶句に長するのであるが、和歌の嗜みも又淺くない。西伯利旅行日記の題辭として、彼の西行法師の諷詠を藉り來れる一事に徴するも、自ら博士が歌道の蘊蓄を瞥見せしめられると同時に、博士の詠としては明治二

十二年二月長等^{ナガラ}山隧道工事初めて貫通せるとき、

ふたつなき長等の洞の直やかに

開けゆく世に逢ふぞうれしき

と満幅の喜悅を寄せたるあり、又明治三十六年八月の述懐一首、

世の中の濁りにしまぬ我が庵の

手植のはちす花咲きにけり

とあるにても以つて博士が悠々たる超俗の高姿仰ぐべしである。なほ

御園生の花のふゞきのひこしきり

けふはここさら身にしみにけり。

ふけわたる大嘗祭たふこさは

かみよながらの心地こそすれ。

博士が折々の述懐

二首のうち前者は、博士が大正三年四月十日、青山御所にて満庭の落花瞭亂たるに、此の日ゆくりなくも皇太后陛下の崩御に會ひ奉りたる。後者は大正四年十一月十四日、今上陛下御踐祚の大典に於ける大嘗祭参列の光榮に浴せる。慶弔その

博士が氣品ある國風の技

時を異にすれども、ともに博士が醇眞の情懷を詠ひ出でたものであつて、これを見るも、其の國風の氣品あり、而して其の技また凡ならざるを知るに足るのである。漢詩に長じ、國風に晦からざる博士に、箏曲「民草」の製作がある。これに就いて別に節を改めて叙ぶるであらう。

①黒龍江上の偶感七絶は本書第四編所載博士の西伯利旅行日記中にあり、參照のこと。

②漢詩は大久保政齊氏と林鶴梁氏に、和歌は中島歌子刀自に學べり。

四、趣味多き「石齋石話」

工學界に於ける專門的研究を經とし、文藝上の趣味を緯とし、博士の人格は渾然として完成せられて居るのであるが、又右の兩者の歸一するところに、頗る興趣深きロマンスは作り出されて居る。而して此のロマンスが他日博士の筆に染められた曉、即ち世に現はれるものは「石齋石話」二卷であるといふ。借問す「石齋石話」とは何である歟。

石齋石話の由來

博士は其の號を石齋と稱すること、これは前章に載せた西伯利旅行日記に於いて明かである。これ博士が專攻する土木工學に對する注意の深厚を意味するもの

専門學より來れる博士の趣味

であつて、博士は洋の東西を問はず、記念すべき工學工業に關係ある石は、自ら實地を視察調査するごとに、必ず其の斷片にても蒐集して、或は應接室に、又或は書齋の裡に蓄へ、研究や思索に疲れたる時、これを餘念なく弄ぶを以つて無上の快心事となしつゝある。曾つて博士の邸を訪へる人は記していふ。

田邊工學博士の邸は眞如堂のほり、翠松紅楓の間にあり、日本風の應接室掲ぐる所の扁額、皆な科學の趣味を帶びざるなし、就中珍什も稱すべきは、落雷の圖、大理石の自然的山水の扁額である。

落雷の圖は圖畫そのものよりも、より多くその用紙に有難味あり、東本願寺の大師堂に一の天窓ありて如何なる故か、其引手繩に鐵線を用ひあり、一日博士之を見て、落雷の災ひあらんことを恐れ、之を麻繩に代へんことを勸む、後數日果して雷公の一撃を蒙り、堂内の金張附雷火のために奇怪至極のものとなり了せり、素よりこれ人間の妙技を弄するにあらず、所謂神工鬼削の玄境也、博士勿皇走つて之を檢し、其の大部分を用ひて法主用衝立の料みなさしめ、其一片を請ひ得て歸り、彼の雷火の及ぶ處、朦々たる黒雲の如きを利用し、畫伯に囑して雷公の失脚せる光景を畫かしたるものなり。

大理石の自然的山水は、山田博士が西清より齎らし返りし者、田邊博士が石齋居士ニ號して

各種の珍石を藏するによりて特に贈られたるものなりといふ額面の上部は大理石固有の乳白色にして、中部に黒褐色の凸凹状を浮ぶ座して之を望めば山嶽重疊雲湧き霧起り、適かに瀑聲の整整たるを聞くが如し、眞個天下の奇石なり、聞説く博士の先考は不二石庵先生と呼ばれ、又愛石の癖ありしと云ふ。

博士曰く予や石齋。と號す。雖も、其の實は石棚のみ、集むる處のもの、悉く工學上の記念物にして絶えて風流韻事の趣味なし、假令へば琵琶湖疏水工事に於いて隧道工事貫通の際劈頭第一鑿先にかゝつて飛び出たる石片の如き、ナイヤガラ發電水力工事の際、同様の意味を帯びたる石塊なき、これ吾が庵の珍什なりと。

博士の年齒は既に不惑の境に近かるべし。雖も、曾てダイヤル教授に反問したるが如く、怪しきまでに年若く見ゆ、乃ちこれ博士が攝生を重んじ、品性を尙び、快樂を食らざるに基するなるべし、白くつやつやしき其の顔面小造りながら強健らしき其の體軀清徹なる其の音聲流暢なる其の辯舌、孰れか博士をして年より若く見えしむるの分素たらざらん、而して是ダイヤル教授の所謂イングリッシュ、ホームに私淑したるの賜物なりと云ふに到つては、哲人の感化力も亦偉なりと謂ふべし、之を要するに地は人、家庭と並びに清く高きもの實に博士に就いて見るを得べし。

一 工業の大日本第一卷第五號所載「日本名士の片影」

博士の號
は石齊又
百石齊と
稱す
一百の石
の物語る
ロマンス

現在、博士の蒐集に係る石は既に一百を算する、故に博士は又の號を百石齊とも呼ぶのであるが、一百の石は一百のロマンスを物語る。博士の心耳の夜となく、日となく、此の石の物語るところのロマンスに相觸れて、専門學的の趣味は文藝上の趣味と一致融合し、生れながらの詩人たる博士の興味はこゝに絶頂に達する。即ち此の時、博士の筆は此のロマンスを紙上に寫し出さざるを得ないのである。此のロマンスに就きては、往年既に其の一端を、次の如く世に紹介せられて居る。

「私の蒐めてゐる石は總て工事に關係のあるもので、石一つ宛に夫々物語を持つて居るのです」田邊教授は記者と一緒に京都大學の校庭を歩みながら語る、私の集めた石はもう百に足りましたが、先づ其の中の二十五の石物語を集めて石齊石話を出版する考へなので、さいつしか大學の正門を出て、吉田神社の並樹道にさしかゝる。

「馬關海峽岸柳島の手前に與次兵衛の岩ミ云ふのがあります。昔豊太閤が朝鮮征伐の時御座船の水先案内に與次兵衛といふ男がゐる御座船を其の岩に衝突したので死刑になつたが、それ以來其の岩には與次兵衛の怨靈が崇つて、随分多くの船が其の岩に當つて沈む、淨瑠璃、九州、與次平衛、灘では朝鮮人だとなつてゐます。然し其の與次兵衛岩も航海の邪魔になるから航路整理事業であの邊の暗礁を一掃する時に、一緒に碎される事になつた内務省所屬

の事業局では與次兵衛丸名付けた船を仕立て、これに最新の岩石破碎機ロッククラッシャを備付けてそれを壊しに掛つた所が其の船は又もや其の岩に衝突かつたので人々は能々與次兵衛の靈の執念深いのに舌を捲いた、然し此の怨靈も文明の利器には抗するこゝが出来ず、大正二年十二月に海面から其の姿を隠して了つたのですがその石の海面より出て居たこゝろの破片が私の手許に残つてゐます。教授は吉田神社の石段を記者と拾ひながら言葉巧に物語る。又もう一つはあの大阪難波橋の獅子の石材ですが、ね、あの石材は伊豫大島の産で、大正元年に山本と云ふ石工があの獅子の石材を一心に鑄つて居る最中、さうした機勢ちぢみか石の角が三寸角程ゴボツと取れて了つた。サー大變だ、新に石を取變へねばならぬさ、いふ事で此石工は仲間の制裁の下に、道具一切を取上げられて、放逐の憂目に遭つた。石工は女房と幼い娘を家に残して西伯利三界まで漂泊して往つた。一方ではその石材を後で能々調べて見るに、全く石に疵があつた放逐された石工の失策でなかつたこゝがわかり、石工を呼び戻さうとしたが、行方が知れぬので其の儘にしてあつた。獅子の石材は再び取寄せられて、秋田の金常弟兄と云ふのが到頭仕上げたのですが、曩の石工は大正五年にやつこ内地に歸り、難波橋の橋詰に佇んで立派に仕上つた獅子をばなつかしげに眺めて居るに、丁度其處へ足掛け五年も會はずに居た自分の娘の學校歸りが來合せて、親子相擁して泣くさ、いふ事實談があるのです。私の持つて居る其の獅子の石材の破片は、コンナ物語をするのです。眞如堂に近い教授

の邸へ入つて立關の直ぐ奥の應接間へ通る。教授は洋服の儘奥から澤山の石を入れた函を持つて来て「これらの石が一つ宛物語をするのですが」紙に包まれた例の與次兵衛岩の破片を見せ又一片の花崗石を取出して「これは樺太五十度國境の石標の一片で其の石標は一面には菊の紋章。他面には鷲の章が鑄られてゐるのです。此の五十度境界は日本側の測量法が精確で露西亞の方が劣つてゐたのですが、此の境界標は其の地方のアンベスの石が、己が一つ國境の番をしてやらうと云ふので最初其の石が石標に刻み上げられたが、さうも思はしくないので、更に三河から石を取寄せて再び作り直し、今では三河武士ならぬ三河石が番をしてゐる譯ですが捨てられた最初の石がこれなんです。此の破片は當時の樺太理事官中川小十郎氏が仲人口をきいてくれたのです。石でも女房を貰ふのと同じで野合ではない、矢張り媒酌がある方が好い様ですから、ハアハア……」又東坡先生殘碑石云々の銘ある朱竹陀藏の古硯を示して「私の祖父は田邊石庵と云つて尾州の儒者で後聖堂の教授になつた人で朱竹陀文集なども出してゐますが、此の硯は祖父の愛藏品であつたが、祖父はこんな名硯は田邊の家なきに置いておくさ失ふ虞があるからと云ふので今から七八十年前東本願寺に献上して、先づ本願寺ならば安全であらうと思つて居たのですが、其の本願寺に先年什器賣却の入札が行はれて、恰度其の際に私がこれを見付けて二百金で購ひ取つたので世上の有爲轉變さ何の處が身を置くに安全か分からぬ世の有様を此の硯が物語つて

るます其の他羅馬法王バチカン宮殿の大理石片や西比利鐵道の工事を物語る瑪腦石、江川太郎左衛門の伊豆韮山の反射爐の基石、ウォータローの戰爭に俺わがかう云ふ働きをしたミ語る火打石銃の火打石、倫敦橋の瓦斯燈の破片迄もある、教授はその硝子の破片を手にこつてこれは私が滯英中倫敦橋を通りかゝるミ瓦斯燈の修繕中で、其の下に散らばつてゐる破片を拾つて來たのですが、倫敦橋上の出來事で一つ面白い話がある、それは或る日一人の紳士が橋を渡つてゐるミ、後から一人の男が足早にやつて來て烏渡紳士に摩れ違つて先へ行つたミ思ふミ、件の紳士のポケットの金時計がすられてゐたので紳士は追跡して向ふの巡查に訴へる、彼の男は進退谷まつて拘つた金時計を其の儘テームス河に投込んで、雲を霞ミ遁け去つたが、其の後六年經つて河底を浚へた時、其の金時計が見出されて紳士に渡されたが、よく改めて見るミ、其の時計は水もはいらず損所もなく龍頭を巻けば動いて時刻を正確に報ずる、それがデント會社製の時計ミ云ふので、女帝は此の會社に褒章をする、其の會社の時計は非常に信用を獲たミ云ふ事ですが、此の瓦斯燈の破片はそんな種々の出來事を私に物語るのです、教授はそれからスコットランド蘇格蘭のフォース橋ミテイ橋ミの橋臺の煉瓦の破片、シムプロン、サンゴタール、レツチベルヒミいふ世界で名高い隧道の石、ミラノ寺院の名高い大理石像の破片を見せて、これらに關する面白い物語はなかなか絶えさうにも無かつた。(完)

大正六年四月九日發行大阪毎日新聞「名流の趣味」

天下の一
大奇書

石齋石話
中の一
篇
「虎の門
の櫓石」

所謂「石齋石話」は斯くの如き内容を有する天下の一大奇書に外ならない。此の一大奇書を綴り得る者は、世界廣しといへども、實に博士を措きて他に其の人はないのであるが、果してこれが完成して世に出づるの日はいつの年であらう。滿天下の讀書子は鶴首して其の日を待望すべきである。なほ左に博士が大正八年一月、東京芝紅葉館に開かれし虎の門會の席上にて發表せられし「虎の門の櫓石」なる石齋石話中の一篇を紹介して置かう。

虎の門の櫓石 大正八年一月芝紅葉館虎の門會の席上にて

僕の生れは伊豆國賀茂郡天城山の麓、御覽の通り面は亦黒く見場は至つて宜しくないが、火に強い安山石切出される之間もなく舟に積まれた相模灘の舟路は大風、不二の高嶺を眺めながら江の島鎌倉へは手の届く様な近い汀を通つて江戸灣へ這入つた時は御用ご云ふ旗が舟に建ててあるので素敵な勢だつた。當時の江戸は今日と異つて芝方面は一面の奇洲、扱々何處へ行くのかと思つて居たら虎の門内舊延岡藩邸の西南角櫓最上の角石に据へられた、彼處は何分にも邊鄙で向に居られる筋違見付萬世橋君萬世橋橋石は石齋石棚で此の石の筋向に置いてある)の様に三百年間面白い見物はして居ないが維新後の新日本を作り出し世界列國と對峙するここの出来る様にして來た多大の成績ある人々を教育し出した

のは僕の處の構内だ、少しは自慢話も出来る、して聞かさうか。

頃は明治六年であつた今迄見た事のない赤い色の小ほけな奴が澤山に外國船でやつて來た、日本で煉瓦ミ名づけたさうだ、此の異國から來た奴ミ日本の石材木材ミ共同で立派な煉瓦家が建築された、英國から六呎三吋ミ云ふ背の高いダイヤーミ云ふ偉い先生が來た、續いてエヤトン、ペリー其の他の諸先生が續々見えた、澤山の學生が各地から集まつて來る、明治の十年には開校式があつて天子様も御臨幸になる、立派な學校で立派な學生さんも澤山居た、エー死んだ南清君などは僕の上で踞座をかいて得意の尺八を取出して吹いたものだった、下の堀は水を湛へたレヅナンス、ボックス何ごも言へない嚙喰たる音が出た、前の金比羅さんなんか感心して聞いて居たものだ、下瀬君も時々は來て腰を懸けたよ、日露戦争で日本が勝つたのは軍人の働き計りではないよ、鐵道水運の輸送の力ミ鐵砲玉が能かつたのが原因ではないか、貴族なんでものは値打のあるものでもなからうし、又未來永く存在し得る物でもないが軍人や政治家に爵を授くるなら南君や下瀬君にはやるのが當り前ではないか、兩君に劣らない大功勞を國家に建てた人が他にも澤山ある、其の傳記を喋つて見ようものならば水許傳の物語よりも遙に面白いが三百年來雨露に曝されて來た此の鐵面皮否石面皮も虎の門會員を目の前に置いては外處で吹く様な譯には行かないから一寸横道へ這入た處を話して見よう、頃は明治の十二年 Pacific Mail Steam Ship Co. Oriental and Occidental Steam Ship Co.

こが合同してP、O、Co、を組織し大平洋と東洋との海運業を一手に掌握せんことをあつた残念ながら當時の日本は國力微々、國の周圍は外國船で取巻かれて居つた、虎の門の連中之を見て、いかでか黙過すべき直に起つてP、O、C、を組織したP、O、C、はポツテットの意味なり、一株の拂込大枚金二錢也、抽籤を以つて幹事を選擧した、幹事自ら拂込金を携へ虎の門外の燒芋屋へ買ひに行き歸來一同タラフクやつて天下國家を論じたのであつたが支那流梁山伯の面々こは大いに異つて論ずる事は空理空論でなかつた、其の證據には見給へ、今日日本郵船會社、東洋汽船、大阪商船、其の他の汽船が虎の門會員の力によつて太平洋印度洋はものかは歐洲迄も鵬翼を延ばして居るではないか、其の基礎は此のP、O、C、ですぜ、なに成金が出来てゐる、それは虎の門の會員だつて世間並に出來て居ようが世の成金は歩のなつた成金、虎の門會員のは金や銀のなつた成金なつても成らなくつても裏でも表でも相違はないのさ、夫よりか聞いて貰ひたい事がある、夫は僕の歴史だ、今話した通り日本國に功績ある人々を作り出した大切な古跡だ、世間にはつまらない物を古物だ、云つて保存するが僕の如きは當然保存さるべき筈なんだが世の没分曉漢は溜池を埋立て、道を取擴げるべき此の歴史ある僕を取壞しにかゝつた、忘れもせぬ明治四十一年の九月一日僕を引却して玄翁で一つポカリとやつた如何にも残念だと思つて居る處へ石齋先生が通りかゝつて石片をポケットへ入れて持歸られた、今では昔時の三百年間と異つて雨にも風にも當らず室内

で蒲團の上で大踞座大平樂も喋れるし今日のように古馴染の人々にも會へるし愉快な身の上である、未だ未だ云ひ度い事は澤山あるが一人の長談儀は御氣の毒だから此の邊で止める事にせう。

五、博士の書畫

之くとして可ならざるなく、學んで達せざるなきもの、即ち之を博士に見るの慨がある。

書は博士が祖父たる石庵先生以來、家門に傳はる教課の一で、博士また幼少より學習したのであるが、京都大學に職を奉じて以來、餘暇には山本竟山氏に就いて愈修業を重ねた。而して現在世に矚目せらるゝ博士の書の重なるものとしては、先づ

疏水隧道
の額面と
蓮舟翁墓
誌

琵琶湖疏水路の第一第二の疏水の合流する隧道の額面に揮毫した、藉水、利資、人工の六大文字を擧げねばならぬ。次いで蓮舟翁の墓誌を傳ふべく、又大正六年に於いては、曩に御大典の際朝見所たりし其の一部の建物を宮中より大學に下賜せられ、之を教場として大學數地の東部に建築した、其の建物の額に博士は大教場の三大字を書いたのであつた。

紺地金泥
の盤若心
經

最近の揮毫として有名なのは大正九年箱根強羅公園の別業に於ける紺地金泥の般若波羅密多心經である。この堂幅は高野山金剛峰寺に奉納し、同時に之を英靈塔の本尊とするため、北歐より將來のエメラルドパール石に彫刻された其柘本が前編掲出の寫真である。謹嚴高邁の書風は、博士の風格を宛らに傳へて千歳の後人をして仰望せしめずんば止まぬであらう。

書に於ける博士の勁敵は靜子夫人

然るに書に於いては、偶然博士は自身の面前に一大勁敵を見ざるを得なかつた。それは外でもない、靜子夫人で、夫人もまた竟山氏を師として習字の技著しく進めることである。而して夫人が丹心院殿靜屋宗玲大居士、即ち先考北垣國道氏の三週忌に當り、洛北紫野大徳寺に納めた其の自筆の般若波羅密多心經の大幅は、博士の揮毫に比して其の練達の筆致、互に相譲らざるものとし、人によつては寧ろ博士以上であると稱して居る。輸贏いづれに歸するも、家門の清福轉た慶すべきでないか。

家門の清福轉た慶すべし

博士の畫は、大正六年十月十五日、皇后陛下が京都市上水場台覽の砌、端なくも陛下の御眼に止めさせらるゝところとなつた。それは此の日の御説明役は博士であつたので、博士は曾つて獨逸ミュンヘン博物館へ寄贈せる琵琶湖疏水鳥瞰圖

のうち、獨文を挿入せざる複本一幅を所持して居たので、この圖を台覽に供し奉るべく、瀧過場内に謹掲して置いたのである。陛下には圖を御覽じて博士に對し、最初より諸事業に盡力のほど御苦勞であるとの御言葉を賜はせられた。又此の鳥瞰圖は分りよいと御沙汰があつたので、後博士は此の圖を豎一尺三寸幅三尺五寸の絹本に縮少し極彩色にて謹寫し、なほ圖の中に陛下の行啓ありし御場所を記入して表装の上奉獻した。他に一幅、御慰めに御覽に入れるがよいと大森皇后大夫人の話があつたので、博士は別に飛瀑圖を揮毫し、これをも添へて獻上したところ。皇后陛下へ早速奉呈候處、御満足に被思召尙又飛瀑の圖一幅御留置に相成つたとの通知が大森皇后宮大夫より大正七年六月二十二日に到着した。

英國皇儲
殿下へ獻
上の畫

の鳥瞰圖は、博士が右の扣として收藏せるものを臺本として、新に英文説明を加へたものであつた。

博士の師
事せる畫
家

博士の師事せる畫家は、山本春舉、西井敬岳、高瀬春曉の緒氏であり、博士の技は既に堂に入つて居るのである。

⑤本書掲出の書は第二編第二章のうちに録せし七年夜雨の詩にして、畫は博士還曆の年

の箱根滞在中にものせし芦湖の景色である。

六、博士の篆刻

西伯利旅
行中の逸
話たる印
材の篆刻

博士曾つて西伯利鐵道視察の途次黒龍江上にて其の乗船の坐礁するや、博士は淺瀬を徒渉して江岸に渡り、四邊の風色を賞する傍、偶に一顆の瑪瑙石を拾つて石齊の二字を篆刻したる逸話は前篇に述べた通りである。博士の多能なる此の篆刻の方面にても、自家一流の妙趣を示し、博士の鐵筆は世の珍重するところとなつて居る。

博士が鐵
筆を揮ふ
時

背廣服の
ポケット
に印刀と
印柱とを
用意す

博士が鐵筆を執るは概ね停車場などに於いて汽車の出發を待合せる際の如き、斯かる零碎の時間すら多忙なる博士にとりては極めて尊きものであり、博士またこれを利用して精神を轉換し、此の時間内全く雑念を超過して、悠々趣味の境地に遊ぶのである。これがため博士は其の背廣服のポケットに印刀と印柱とを用意して居ることがある。僅少の時間も重なりては遂に一藝に通達する最良の課程となる。博士の細心と多才とはこゝにも發揮せられて遺憾なきものでないか。

博士は或る時、京都驛の待合室にて、例の如くポケットより鐵筆を取り出し、熱心に

京都驛長より印材篆刻を懇望せらる

印を刻んで居た。これを見つけたものは時の驛長西松氏であつて、氏は隙さず、博士に一顆の篆刻を懇望した。博士は快くこれを諾して、後に氏に贈つたものは次のやうな前書きを附せる印材であつた。その書は現に西松驛長の手に卷物となつて印柱と共に秘藏せられて居るのである。

嘗聞京都驛長西松君善書、九鬼樞府謂君能居動領靜、爲撰號曰靜軒、君頃日需刻印於余、々好弄鐵筆、但憾無工夫、每以公務往東京、必携一石、在東海道列車中、轉輪讀書、停輪則刻畫不輟、凡往復東京二回而刻乃成、居動領靜殆非君之所自專也歟、爰記其由以贈君云爾、大正戊午六月、石齋識

博士の多能なる所以

徒に博士の多能を羨むを止めよ。博士の諸藝を能くする實に平常右の如き綿密の用意あるにより、其の時間を驅使するに自在なる、眞に後進の學ぶべきところであらねばならぬ。なほ編者は以下項を逐うて、スタンダード記者の所謂、音曲に堪能にして殊に彈琴に妙を極むる所以を節を改めて叙ぶるであらう。

七、博士の箏曲

博士が箏曲の趣味は少年時は

博士が箏曲に趣味を有するは、少年時代に於ける家庭の感化に因由するところ尠くない。博士の一家は幕末の悲境を凌ぎ、明治初年、再び東京に居を占めて以來は、

代の家庭
の感化に
よる

病床に臥
して日常
の必要よ
り箏に親
しむ

姉君より
箏を指南
さる

下婢を使ふまでには行かずとも、往年の窮迫に比し、幾分の餘裕を生ずるに至つた。それゆゑ、姉君鑑子嬢に以前箏を教へて居た元の師匠も、時々博士家を見舞うて來るところから、十三弦の床しい調べの門外に漏るゝ日も稀でなくなつた。

博士の箏に親しみ初めたのは其の折柄であつた。恰度斯様な少年時代に博士は一月餘も病床に就いたことがある。容態は一時可成り氣遣はれたのであるけれども、當時田邊家の生計を以つてしては家事のために人を雇うて置いて母堂や、姉君が二六時中博士に附添うて居るわけには行かなかつた。看護の暇には薪水のわざや、其の他の家事に當らねばならないので、此の可憐な病少年の枕頭には、一本の物指尺と姉君の手馴れの琴があてがはれて居た。用事があれば尺で箏を叩けば、人を呼ぶ合圖になるからである。斯ういふ優しい心づくしの力で、博士の病は遂次快方に向つたが、治くなる日ごとに自ら箏に馴染む習慣がついて、尺で十三弦を弄びつゝ、博士は巧みに聞き覺えの曲を彈奏することが出來たといふ。

このいたいけな所作を見て病中の慰めに、姉君は箏曲の手を博士に教へ、博士また熱心に稽古したので、全快の時分には、六段と八千代獅子とは本式に彈けるやうになつた。しかし、其の後の博士は全く學業に没頭し、大學を卒業してからは、疏水事

業を始め、北海道鐵道工事時代に入つて、箏に親しむ暇は全くなかつた。明治三十年、京都帝國大學に赴任して後、漸く博士に多少の餘裕が與へられ、博士をして少年時代の趣味を懐かしめたのである。

靜子夫人
と箏

靜子夫人また北垣氏の息女として、箏は一通り修められて居たことは謂ふまでもない。博士はある時、夫人に一曲所望したが、夫人はすつかり忘れて居て、弾けませぬとの辭であつた。記憶力の確かな博士は自己の經驗から割り出して、始めはそれを本當とはうけとらなかつたのであるが、段々知友の夫人達などについて、聞き合はせて見ると、十人が十人ながら婚嫁して家庭の用事や、育兒のことに携はるやうになると、處女時代の稽古は跡方もなく忘れさられてしまふのが例であつた。

江良千代
子女史を
聘して學
ぶ
箏曲の上
にも科學
的考案を
凝らす

博士は其の重なる原因は箏曲に適當した譜が出来て居ないからであると考へた。それゆゑ、明治三十六年より、夫人が北垣家にありし當時の師匠江良千代子女史を聘して、夫人も博士も、ともに入門して、正式に箏曲を習ふことゝなつたが、以來博士は其の一流たる科學的考案を箏曲の上にも凝らして、稽古に便利な曲譜の速記術や作譜を創り出すに至つた。これによつて、博士は夫人と競争の姿で、八ヶ年の後には奥免狀も授けらるゝまで上達したのである。

雛祭の行事と博士が年一回の彈奏、千鳥と菊水

明治四十年二月十二日には、博士は名作の箏を購つて之に「千鳥」と命名した。其後又故古川龍齋翁遺愛の名箏銘「菊水」をも入手した三月三日は、博士家、年中行事の一なる雛祭の日であるが、此の年の雛祭に米國のラッド博士夫妻は招かれて、饗應を受け非常に満足したといふ。それは此の雛祭の日に限つて、來賓の前で博士の彈奏があるからである。

博士例外の彈奏

博士は家庭以外では決して彈奏しないことに定めて居る。例外としては蓮舟翁金婚式の砌、芝紅葉館で彈奏した、この事は前編に引用した博士の令姪花圃女史の文章にある通り。それ以外では、京都の祇園中村樓に廣田理太郎博士滯溜の時、廣田博士の竹に合奏したことがあるばかりである。其の時の曲は「千鳥」「殘月」及び「雲井」であつた。當時の興會眞に艶羨に堪ふるでないか。

(○)古川龍齋翁の歿後家政整理のため其の所有品の賣却があつたとき遺愛の名箏「菊水」を博士が買求めてそれへ博士自筆の菊水の圖を繪きたる油單を添へて民草作曲の記念として江良氏へ贈られた。

八、博士の作曲「民草」

作曲上の
興味頻りに
動く

箏曲彈奏の技、年を逐うて上達すると同時、博士が作曲上の興味は頻りに動いた。而して博士は其の専攻たる工學が、直接社會の實生活に結びついて、何人もこれに興味をもつやうにならねばならぬといふ、博士自身の年來の宿論を徹底せしむる爲にも、工學上の事業を箏曲に作りあげることに一層熱中せざるを得ない。博士は斯くして遂に疏水工事を題材として、愈作曲に着手することになつた。

疏水工事を
題材として
愈作曲に着手

それは明治四十三年の事である。博士は右の趣旨から工夫を凝して一曲を起草した。然も容易にこれを人に示さず、草稿を居室に貼りつけて置いて、博士は氣の附いた時々、添削を施すことにきめたが、後には終篇殆んど一字の原形を存するなきに到つた。斯様な苦心の結果、漸く脱稿して後、博士は更にこれを坪内逍遙博士の校閲を乞うたが、此の一曲こそ世に傳へらるゝ「民草」の名作に外ならない。

名曲「民
草」成る

皇后宮の
上聞に達す

「民草」は江良千代女史によつて曲譜を附けられ、明治四十五年五月京都市三大事業の完成に際し、恰も博士在職三十年の紀念祝賀會を市公會堂に開催の席上初めて演奏せられた。疏水工事は其の財源を明治天皇の恩賜産業起立金に仰ぎ、皇室の御軫念淺からざりし大事業とて、之を題材とせる博士の作曲は、長くも皇后陛下の上聞に達し、畏き御沙汰を賜つたので同じき四十五年五月、博士は「民草」及び其

の作曲由來を香川皇后大夫の手許に差し出したのであつた。

民 草 半雲井 生田流箏曲

たみぐさのうるほふためこみやこ路へ。またひきいだす琵琶のうみ水(合)

大内山のいやたかく。みかはのながれきよらかに。きのふにまさる京の水(常調)

うつるけしきのおもしろや。柳さくらをこきまぜて。みやこ大路のひろびる(合)

たえぬゆききの馬くるま(合) わだちすぐなる君か御代(手事) (中そら)

かけまくもあやにたふこき大君の。人のたくみをたすけんの。みここのりこそかしこけれ(合)
みここのりこそかしこけれ

右説明

琵琶湖疏水は 恩賜産業基金を基として起工したる本邦最初の水力電氣事業にして明治二十三年其の竣功式へ 兩陛下臨御被爲在、自今此の水利に藉つて以つて人工を資け他日の殷富を期せよとの勅語を賜りたり。

爾來工業大いに進み水電力の不足を感じ第二の疏水及び上水工事を起し本年四月完成せり。

今回落成したる京都御所防火御用水は此の新舊兩水路より引水することを得るものなり。又京都停車場より京都御所に達する道路其の他重要なる路線を擴張し市内益々繁榮に赴

くは勅語及び 恩賜産業基金に基くものにして聖恩の偉大なるを謠ふ爲に前記諸事業を擔任したる内匠寮御用係京都帝國大學理工科大學教授工學博士田邊朔郎が事業完成の祝歌として作りたるものなり作曲者は京都府盲啞院卒業生江良千代なり明治四拾五年五月

民草の御
前演奏

當日の次
第

後大正八年五月十九日 皇后陛下京都市行啓中この「民草」は陛下の盲啞院台臨に當り、御前奏樂に選ばれるゝの光榮を得た。博士の専門業餘の藝術、是に於いて乎、また有終の美を濟せるものといふべく、當日の次第は新聞紙によつて次の如く報道せられて居るのである。

皇后陛下には十九日午後二時盲啞院に行啓あらせられ盲生の音曲科の授業を御覽ありたる際、楓の花を約二十分の久しきに亘りて御聽き在らせられたるが此の時廣瀬院長より特に箏曲民草を追加したき旨大森大夫を經て言上したるに 陛下には直に御許しあり即ち囑託教員伊藤れん子は琴に向ひ左の「民草」の歌を唄ひつゝ、獨奏して御聽に達したり。(歌略)

「民草」は京都市の第一疏水工事が 先帝御東幸の際十萬圓の御下賜金ありしを基金として完成され市民が今日の如く多大の恩恵を受くるに至りし感激の至情を上間に達すべく疏水工事の設計者たる田邊朔郎博士が心血を注ぎて自ら作歌せしものにて盲啞院出身の逸才江良千代子の作曲に係るものなり、此の歌詞は曩に兩陛下に捧呈しあるも未だ實際の彈

琴を御聽きに達したるこなきより、田邊博士は今回の行啓は絶好の機會なれば、こて上聞に達せんことを懇望し居たるものなるが大森大夫より此の由來を言上せるに、陛下には特に御首肯せ給ひて約十分間に亘る彈奏を御熱心に御傾聽あり御感の御言葉をさへ下し賜りしに

大正八年五月二十日發行日出新聞記事「御感に入りし民草」